

講座 言語●第1巻

言語の構造

柴田 武編

講座 言語●第1巻

言語の構造

柴田 武編

講座言語 第1巻

言語の構造

© T. Shibata 1980

1980年7月15日 初版発行

¥ 2,000

検 印

編 者 柴田 武

省 略

発行者 鈴木 敏夫

発行所 株式会社 大修館書店

(101) 東京都千代田区神田錦町3-24

電話 東京 (294) 2221 (大代表) / 振替 東京 9-40504

印刷 / 壮光舎 製本 / 牧製本 装幀 / 鳥居満

*3380-110510-4305

第1巻への序

言語の構造を研究する「構造言語学」は20世紀の言語学の主流である。ソシュールに始まり、イエムスレフ、トルベツコイ、ヤーコブソン、そしてブルームフィールドを経てチョムスキーに至る言語学はすべて「構造言語学」に属する。したがって、その研究方法も確立していて、本書の各篇はいずれも、主としてわれわれの母語を対象に述べている。舶来の方法を日本語に適用してみるといふ段階ではない。

構造言語学の方法は、複雑で多様な現象を抽象化し一般化して、単純なワク組みをつかみとるもので、言語を単なる要素の集合としてではなく、関係とその組み合わせとしてとらえる目を持っている。そこに働く論理は言語の内部にあるもので、外から与えられるものではない。

初期の構造言語学によって世界のおびただしい言語が記述され分析されたが、それは世界の言語の多様性と個性を強調することはあっても、人類の共有財産である言語の普遍性を認識することからは遠ざかる結果となった。チョムスキーの理論はこれを救うためにあらわれたと言ってもいい。多くの言語を深いところで結びつけて、言語の普遍性に至る道を見つけようとしている。

チョムスキー以後は、伝統的構造言語学にも、単なる記述だけではなく、説明を加える努力が見られるようになった。演繹の方法や話し手の直観を利用する方法も受け入れられつつある。こうして、構造は静的なものから動的なものになろうとしている。

しかし、チョムスキーを含めたすべての構造言語学に通ずる特徴は、特定の具体言語にはかかわらない点である。ソシュールの

用語を用いれば、ラングに終始して、パロールを見ないという傾向である。

さて、本書においては、まず、「ことばの構造」ということを改めて考え直すこと（「ことばにおける構造とは何か」）から始め、ついで、音韻・アクセント・文法の各面に分けて、その構造を問題にした。語彙については、構造があると期待されながら、まだ模索の段階にあると考えたから、「語彙に構造があるか」という問の形にした。また、ブルームフィールドでは疎外された「意味」そのものの構造から、それと結びつく「概念」の世界を探ることにした。（「意味の構造と概念の世界」）しかし、さらに進んで referent（外界の世界）までは題目としてとりあげなかったのは、それは構造言語学の境界線の外にあると考えたからである。

以上の共時的観点に対立する通時的観点から、一項「言語の構造の変遷」を設けた。言語変化は、個々の要素の変化であるとともに構造の変化でもあるからである。

冒頭的一篇に対応して、構造言語学という方法自体を歴史的に展望することを必要と考え（「構造言語学の成立」）、そして、生成文法理論からの伝統的構造言語学に対する批判を聞く意味で最後の一章（「構造言語学と生成文法理論」）を特に立てた。

1980年5月

柴田 武

講座言語・全6巻

——内容目次——

第1巻 言語の構造（柴田武編）

ことばにおける構造とは何か	柴田 武
音韻の構造	小泉 保
アクセントの構造	上野 善道
文法の構造	久野 暲
語彙に構造があるか	日下部文夫
意味の構造と概念の世界	國廣 哲彌
言語の構造の変遷	井上 史雄
構造言語学の成立	千野 栄一
構造言語学と生成文法理論	長谷川欣佑

第2巻 言語の変化（池上二良編）

言語の変化	池上 二良
古い言語の記録	築島 裕
言語の音の変化	田中 利光
文法の変化・単語の変化	大江 孝男
言語の変化の地理的・社会的背景	加藤 正信
記録以前の言語を推定する	風間喜代三
言語の分岐的発達と収束的発達	下宮 忠雄
生成文法からの解明	早田 輝洋
数理的にみた言語の変化	浅井 亨

第3巻 言語と行動（南不二男編）

言語行動研究の問題点	南 不二男
言語行動のモデル	J. V. ネウストプニー
言語行動概観	林 四郎
言語行動と心理	芳賀 純
多言語社会における言語行動	比嘉 正範
発達の面からみた言語行動	天野 清
精神障害と言語行動	木戸 幸聖
言語行動の分析	野元菊雄・江川 清
言語行動の記述	杉戸清樹・沢木幹栄

第4巻 言語の芸術（千野栄一編）

ことばの芸術と芸術のことば	千野 栄一
記号としての文学作品の受容	平井 正
民話の語りにおける定型	直野 敦
「ことば」と「美」	渡瀬 嘉朗
ロシア・文学の言語理論	川端香男里
テクストの言語学とテクストの詩学	池上 嘉彦
ロシア・フォークロアの言語と詩学	伊東 一郎
文学的コミュニケーションの特性	菊池 武弘
口承伝承の記述	西江 雅之

第5巻 世界の文字（西田龍雄編）

世界の文字	西田 龍雄
文字の発生と絵文字の世界	杉浦 康平
表意文字と表音文字	日下部文夫
ギリシア・ラテン・アルファベットの発展	松本 克己
スラヴ系文字の発展	千野 栄一
シリア系文字の発展	伴 康哉
アラビア系文字の発展	内記 良一
インド系文字の発展	田中 敏雄
東アジアの文字の発展	西田 龍雄
マヤ・アステカ文字	植田 覚
失われた文字	矢島 文夫

第6巻 世界の言語（北村甫編）

世界の言語	北村 甫
インド・ヨーロッパ諸語	風間喜代三
セム・ハム諸語	松田 伊作
ウラル諸語	小泉 保
アルタイ諸語	大江 孝男
シナ・チベット諸語	橋本萬太郎
アウストロ・アジア諸語	坂本 恭章
アウストロネシア諸語	杉田 洋
インドの諸言語	奈良 毅
アフリカの諸言語	西江 雅之
アメリカ・インディアン諸語	青木 晴夫
コーカサス諸語、バスク語	下宮 忠雄
旧アジア諸語	宮岡 伯人
アイヌ語	田村すゑ子
朝鮮語	梅田 博之

●目次

第4巻への序	iii
--------------	-----

ことばにおける構造とは何か（柴田 武）

I 構造の把握	5
II 構造における要素	8
III 構造における相互関係	12
IV 構造という概念	15
V コソア	19
VI コソアと他の体系	33

音韻の構造（小泉 保）

I 個別的音韻の構造	45
II 一般的音韻の構造	68
III あとがき	82

アクセントの構造（上野善道）

I はじめに	87
II 表記法	88
III 具体的記述例	112
IV おわりに	132

文法の構造（久野 暲）

I はしがき	137
II 変換文法理論の構造	142
III 変換規則適用の巡回性	160
IV 文法モデルと予言性	168

V	談話部門	173
VI	あとがき	179

語彙に構造があるか（日下部文夫）

——関連体系をめぐって——

I	相関	185
II	アガル・ノボル	186
III	ハシル・アルク	188
IV	ヤル・モラウ	191
V	フクラム・フクレル	194
VI	アツイ・サムイ	195
VII	続アツイ・サムイ	200
VIII	夏場・冬場	202
IX	アツイ・スズシイ	204
X	ヌグ・キル, ヤク・ニル	208
XI	アタマ・アシ	213
XII	おわりに	215

意味の構造と概念の世界（國廣哲彌）

I	意味と概念	221
II	概念の体系	224
III	意味の構造	235
IV	言語の認識・思考への影響	249

言語の構造の変遷（井上史雄）

——東北方言音韻史を例として——

I	言語史における構造と体系	257
II	東北方言の母音体系	259
III	東北方言の子音体系	265
IV	内的再構と相対年代	267

V 類推——文法体系と音韻変化	278
VI 東北子音体系の変遷	282

構造言語学の成立（千野栄一）

I 構造言語学以前	293
II 言語学の歩み	296
III 構造言語学の土壌	297
IV 二人の先駆者	301
V ボドゥアン・ド・クルトネ	302
VI フェルジナン・ド・ソシュール	305
VII ブラハ学派	307
VIII グロセマティックス	309
IX ロンドン学派	311
X アメリカ構造主義	312

構造言語学と生成文法理論（長谷川欣佑）

I はじめに	319
II 構造言語学の特徴	320
III 生成文法理論と「文構成の原理」	326
IV 結論	344

事項索引	351
人名索引	357

● ●

講座言語第1巻

言語の構造

● ●



ことばにおける構造とは何か

柴田 武

I 構造の把握

ことばに「構造」があるということは、ことばをあたかも建築物のように見ていることである。「構造」とはもともと建築関係の用語だからである。

ことばは、話し手が音声を発するプロセスを見ても、話し手が自分の意志を相手に伝えるコミュニケーションのプロセスを見ても、一つの動きまたは働き、すなわち、コトであることがわかるが、それを仮に、建築物のようにモノとしてとらえて固定させるところに「構造」が出て来る。ことばはモノではないが、モノとして扱うことにしなければ「構造」は見えて来ないというのである。これは科学が持つ一つの有利な方法ではあるが、一方で、それはもはや現実のことばとは別のものを扱っていることを認識しておく必要がある。

現実のことばは、いつのときか、どこかで、だれかが、だれかに対して使われるものである。具体的な現実としてのことばは、時間、空間、話し手、話し相手のそれぞれが特定のものである。そうした特定条件をすべて捨象するところに、ことばの「構造」がある。もちろん、「構造」には、たとえば、1980年に、東京で、A氏、B氏、C氏がそれぞれA'氏、B'氏、C'氏に対して話したという条件がいわばラベルとして張られはするが、そのことは「構造」そのものに何の影響も与えない。1970年に、京都で、D氏、E氏、F氏がそれぞれD'氏、E'氏、F'氏に対して話したという条件のついた「構造」と、構造のつくり方、説明のしかたについては何も異なるところがない。こういう捨象を施すからこそ「構造」がつかめるのだといってもいい。

また、同じ言語内容も、そのときどきで、話の早さ、音の高さ、強調の置き方がいろいろに変わる。その変わる部分も捨象される。「構造」を得るのに関係のない (irrelevant) ことと関係のある (relevant) こととを分離して、前者を切り捨てることになる。これが「捨象」であり、「抽象化」である。

「構造」を得るのには、この「抽象化」(「捨象」) と、もう一つ「一般化」が必要である。「構造」はよく幾何学的図形で図示されるが、「母音三角形」はその一つの、しかも古典的な例である。(図1)

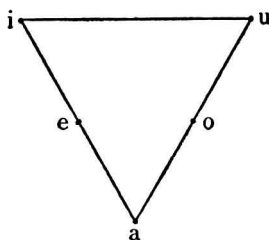


図1 母音三角形

母音三角形における母音の位置は、調音にあずかる舌の位置を示しているが、現実の口腔内の舌の位置はこのようにまっすぐな線で互に結びつけられるようなものではない。さらに、発音するときによって、また個人によって、この五つの母音の位置関係がいつも同一ではありえない。それを多少「強引に」三角形として把握するということは、ここに「一般化」を行なう必要があるからである。

こうした「一般化」を妥当に行なうためには、同種の情報をできるだけ多くの話し手(話し相手)から集める必要がある。もともとことばの「構造」とは、同一言語社会のメンバーが共有している「共通の」「道具」なのだから、個人で異なる道具が「同一